

平成 16 年度 教員個人評価（試行）の集計・分析報告書

低平地研究センター

1. 個人評価の実施状況

1)対象教員数，実施者数，実施率

対象教員数（人）	実施者数（人）	実施率（％）
4 (教授 2、助教授 1、講師 1)	4	100

2)教員個人評価（試行）の実施概要

評価組織	低平地研究センター 個人評価専門委員会
構成	荒木宏之（センター教授 / センター長） 林 重徳（センター教授 / 副センター長） 外尾一則（理工学部教授 / 副センター長） 武田 淳（農学部教授 / 副センター長）

実施内容と方法：

低平地研究センター個人評価実施基準、同指針に基づき、評価項目とそれらの重みを各自が設定。

実施対象期間をセンター改組時（平成 13 年度）から平成 16 年度までの 4 年間とし、活動実績の様式に活動実績を記入し（添付資料で明らかな場合は必ずしも記入を要しない）それに基づき自己点検・評価を行い提出。

評価専門委員会を平成 18 年 6 月 1 日に開催し（出席者：荒木、林、武田）提出された評価資料をすべて点検・評価し、委員会の評価点、コメントを集約。

添付資料：

低平地研究センター個人評価実施基準

低平地研究センター個人評価実施指針

個人目標申告書（様式1） 活動実績報告書（様式2） 自己点検・評価書（様式3）・

評価結果（様式4）の各フォーマット

2. 評価領域別の集計・分析と自己点検評価

(1) 研究の領域

1) 評価項目ごとの実績集計と分析

論文数

	年間一人当たり平均	最少	最多
学術論文	7.4	4.0	9.5
審査付き学術論文	3.1	1.3	5.0
講演発表論文（学術）	14.8	11.3	21.3

・教員によって論文数には若干の幅があったが、過去4年間に審査付き論文がない教員はいない。

学内外共同研究、国際共同研究

・全員がいずれかまたは両方を目標項目に設定し、かつ100%達成している。

競争的資金

・全員が研究代表者としてほぼ毎年1件を獲得している。

センター業務と連携した研究

・全員が業務と密接に連携した研究を行っている。

2) 研究の領域における教員の活動評価集計と分析

・自己評価（達成率）は平均85%であった。各評価項目とも概ね目標を達成している。

・審査付き論文、国際シンポジウムへの投稿数に関して努力の余地がある教員がみられた。

3) 研究の領域における部局等の自己点検評価

・少人数でありながら十分な業績を達成している。

・他の評価領域（特に、社会貢献、国際貢献）の過剰な負担のため論文作成・投稿に支障が出ている場合があり、個人およびセンターとしての業務分担や人的資源の獲得などを模索する必要性が認められた。

(2) 教育の領域

1) 評価項目ごとの実績集計と分析

教養教育 / 学部教育科目担当

・全員が教養教育一科目と理工学部の講義を一科目または複数科目担当している。また、文化教育学部の科目を担当している教員もいた。

大学院授業担当

・全員が2科目以上を担当している。

大学院修了学生数

	博士主指導	博士副指導	修士主指導	修士副指導
有資格者一人当たり年平均	0.25	0.63	1.88	2.2

・表の通りであり、平均して4年に1名の博士学生、毎年2名弱の修士学生を修了させている。

学生生活指導, FD 活動, 教育改善の取り組み

・いずれの項目に関しても全員が個々人の工夫で取り組み、平均的な成果を上げている。一般的にはFD講演会などへの参加に余地があるとも言える。

2) 教育の領域における教員の活動評価集計と分析

・自己評価(達成率)は平均95%であった。

・教養教育、学部教育、大学院教育の各評価項目ともに積極的に取り組み、十分に目標を達成している。

3) 教育の領域における部局等の自己点検評価

・本センターは研究センターであるので学部教育の負担義務は基本的にはないが、実際にはそれも含めて本学の教育に十分に貢献している。

(3) 社会貢献の領域

1) 評価項目ごとの実績集計と分析

学会の役員、審議会などの委員

- ・全員が、国、県、地方自治体、関連学会などの委員長、委員、幹事など複数に就任している。一人一年平均 13.2 件であった。

低平地研究会(LORA)の運営

- ・全員が運営委員長、委員、幹事長、部会長として運営に参画し、研究会を通して地域に貢献している。

国内研究集会の開催に貢献する

- ・全員がセンター主催の市民フォーラム、地域コンソーシアム成果発表会、低平地研究会研究成果発表会などの企画、運営、講演などに貢献している。

学外からの依頼講演など

- ・全員が高校等への出前講義、学協会等からの依頼講演のいずれかを引き受けている。

2)社会貢献の領域における教員の活動評価集計と分析

- ・自己評価（達成率）は平均 105%であった。
- ・中には達成率が 120%とする者もあるほど十分な社会貢献を達成している。

3)社会貢献の領域における部局等の自己点検評価

- ・いずれの項目においても十二分の活動実績がある。
- ・少人数の研究センターで、毎年、複数回の国内研究集会を 15 年間も継続開催しているところはなく、社会貢献領域の活動は申し分ない。

(4) 国際交流の領域

1)評価項目ごとの実績集計と分析

国際会議の開催、参加

- ・センターでは「国際低平地研究協会 (IALT)」を主宰しており、運営委員、編集長として、英文学術誌の年 2 回発行、シンポジウム開催などの運営に貢献している。

- ・センターでは 2 年に 1 回、国際シンポジウム (ISLT) を主催しており、全員が実行委員長、論文委員、ローカル委員などとして積極的に参画している。

- ・国際会議への投稿・発表・参加も積極的である。

留学生の受け入れ

- ・留学生に関しては教授が主指導となるケースが多く、それ以外では少ない。教授の平均修了留学生数は 0.25 / 年・人あった。

2)国際交流の領域における教員の活動評価集計と分析

- ・自己評価（達成率）は平均 100%であった。
- ・各自十分に達成している。

3)国際交流の領域における部局等の自己点検評価

- ・自らの国際学会を中心に運営し 10 年間継続して国際交流活動を展開していることや、世界の低平地域との交流も活発であり、申し分ない。

(5) 組織運営の領域

1)評価項目ごとの実績集計と分析

- ・全学委員の役割はセンターの特性上少ないが、数人は教養教育運営機構の部門幹事、安全衛生委員として貢献している。
- ・センターの運営に関しては、全員が毎週開催のセンター会議に参加し、また、センター内各種委員会（業務分担）に各教員が責任をもって当たっており、個人ごとの目標達成度は高い。

2)組織運営の領域における教員の活動評価集計と分析

- ・自己評価（達成率）は平均 90%であった。
- ・各自十分に達成している。

3)組織運営の領域における部局等の自己点検評価

- ・少人数の組織であり、全員が重要な業務分担をしている（せざるを得ない）。平均的にも過重な負担が認められるし、身分以上の責任が負わされる場合もあり、不満が全くない訳ではない。
- ・上記の点を緩和するために外部資金による事務補佐員の雇用、非常勤研究員の雇用などの自助努力も行っているが、さらに財政的／人的資源の確保が必要であろう。

3. 教員の総合的活動状況評価の集計・分析と自己点検評価

1) 総合的な集計・分析結果と部局等の自己点検評価

	平均	最低値	最高値
研究	85	60	95
教育	95	80	100
社会貢献	105	100	120
国際交流	100	100	100
組織運営	90	80	100
平均	95	84	103

- ・各教員の総合的な評価点（達成率）は95%である。
- ・若手教員に達成率が若干低い者が見られたが、これはセンター業務全体が過重となっているためとも言えるが、個人評価制度の実施を機に各領域のバランスを考慮して今後努力してもらいたい。

2) 個人評価に関する構成員からの意見を調査している場合は、まとめたものを添付

- ・重み配分基準を設定しているが、その範囲に入らない場合があることについて意見があったが、当面は実施指針第3項により、個々人ごとに設定変更を行うこととした。

3) 次年度の個人評価実施に向けての改善案が策定されていれば、それも記載

- ・個人評価の書類作成作業の負担が大きいので、毎年発行している機関誌「低平地研究」の業績・活動報告のまとめ方を個人評価に合致させた体裁とするため、センター「低平地研究」編集委員会において検討する。

4) 段階評価試行結果の検討（意義，有効性，活用方法などに関して）及びこれに代わる総合的活動状況評価の集計・分析方法の提案など

- ・センターの自己点検・確認に相当する会議を毎週行っていることから、各活動領域の動きや個人の位置づけなどは日常的に全員が認識・把握している。また、少人数のセンターであるため、大型プロジェクトの申請・実施、シンポジウム開催、出版・発行などセンターが一

丸となり当たっており(当たらざるを得ず)、各活動領域における自己の貢献度や努力の程度はセンター内部で相対的にも常に評価されているとも言える。このように、自己点検、個人評価に関する構成員個々人の意識、認識は日常的に高く、そういう意味で多人数の部局とは、個人評価とその結果の意味が異なるし、現時点でのセンターにおいて意義の大きい制度とは必ずしも言えない。

但し、相対的意味を持たない数値であっても「達成度」を具体的数値として自ら評価することが、特に低い達成率と自覚している教員にとって活動を点検し、目標を再設定する良い機会になったと感じられた。(以上)

平成16年度 個人目標申告書（別紙様式1）

低平地研究センター

平成

年

月

日

職種（

）

氏名（

）

印

I 研究に関する目標

「重み」配分：

項 目	選択欄	備 考
(1) 審査付き学術論文誌に論文を発表する。		
(2) 国際会議及び国内会議において、研究発表を行う。		
(3) 学内外との共同研究を推進する。		
(4) 国際共同研究を推進する。		
(5) 研究代表者として競争的研究資金などの公募に応募する。		
(6) センター業務と連携した研究テーマを推進する。		

II 教育に関する目標

「重み」配分：

項 目	選択欄	備 考
(1) 大学院教育科目を担当する。		
(2) 部局の枠を超えて、横断的に専門教育に貢献する。		
(3) 教養教育科目を担当する。		
(4) シラバスを作成・公開し、教育内容の向上に努める。		
(5) 教育方法の改善に努める。		
(6) 卒業研究及び大学院研究指導を行う。		

III 社会貢献に関する目標

「重み」配分：

項 目	選択欄	備 考
(1) 学会の委員・役員、審議会委員など学外の委員等の活動を行う。		
(2) 低平地研究会の運営に参画する。		
(3) 国内研究集会の開催に貢献する。		
(4) 学外からの依頼による研究集会、講演会に協力する。		

IV 国際交流に関する目標		「重み」配分：
項 目	選択欄	備 考
(1) 国際低平地研究協会の運営に参画する。		
(2) 国際会議の開催に貢献する。		
(3) 国際会議に参加する。		
(4) 留学生の受け入れ・派遣・指導を行う。		
V 組織運営に関する目標		「重み」配分：
項 目	選択欄	備 考
(1) センターの日常運営に参加する。		
(2) センター改組等、組織の発展に寄与する計画立案、改革等を推進する。		
(3) 全学委員会等の委員として大学の運営に貢献する。		
(4) 大学や部局等が開催する行事に参加し、その運営に貢献する。		

- (注) 1 選択した項目の選択欄に○をしてください。
2 独自の項目を設定する場合は空欄に追加してください。
3 特記事項などを備考に記入してください。
4 各領域の「重み」は実施指針を参考にして合計が1となるように記入してください。

- ・平成16年度(個人評価初年度・試行)は,平成13年度~平成16年度(H13.4.1~H17.3.31)について記入してください。
- ・活動実績の分かる資料がある場合はそのコピーを添付すれば本様式に記入する必要はなく,本様式該当欄に「添付資料」と記入して下さい。添付資料では分からない事項は本様式に記入してください。
- ・セル内での改行は,ALTキーを押しながら,enterキーを打鍵してください。
- ・必要な場合は適宜表の行数を増やして下さい。

職 名

氏 名

I 研究の領域

1) 著書,論文等の発表実績

発表実績については,過去4年間(H13.4.1~H17.3.31の4年間)の累積数を御記入ください。

著書(編)	論文総数(編) (うち,査読付編数)	和文原著(編) (うち,査読付編数)	英文原著(編) (うち,査読付編数)	その他(編)
年度 編	編	編	編	編
年度 編	編	編	編	編
年度 編	編	編	編	編
年度 編	編	編	編	編

2) 著書,論文等の発表実績(H13.4.1~H17.3.31の4年間のリスト)

著書,総説,原著論文(和文,英文),国際会議プロシーディング,総説等の区分に分けて科研の様式に従って記入してください。添付資料については色分けなどで分かるようにしてください。

- ・
- ・

3) その他の研究活動実績等(特許,受賞,佐賀大学が世話役となって行った学会・研究会,研究に関する国内外の交流・研修,講演会講師など)(H13.4.1~H17.3.31の4年間のリスト)

- ・
- ・

II. 教育の領域

1. 教養教育・学部教育： 講義・演習・実験・年度など

区分	年度・授業科目名	対象学科・学年	学生数	コマ数
主題科目 部会名：				
講義 演習 実験				
その他				

2. 大学院教育（博士前期課程・博士後期課程）

	年度・授業科目名	対象専攻	受講人数	コマ数
講義・セミナー・ 演習など				

3. 学部・大学院（博士前期課程・博士後期課程）研究指導など

卒業研究 指導学生数	大学院主指導学生数		学位取得者副指導数	
	前期（修士）	課程博士	前期（修士）	課程博士
年度 名	名	名	名	名
年度 名	名	名	名	名
年度 名	名	名	名	名
年度 名	名	名	名	名

・学生の修士論文題目，博士論文題目，及び学外における研究学習発表，受賞など

--

4. 教育改善の取組

(講義・演習・実験等における授業・指導方法の工夫，授業プリントや教材の作成など)

自由記載により具体的に説明し，自己アピールする。

--

5. 教育研修・教育活動 (FD・SDへの参加，講演会，講習会など)

研修，講習会等の名称	開催日等	参加時間数
	平成 年 月	時間

6. 学生への生活指導等 (オフィスアワー，クラス担任，クラブの顧問教員など)

指導の区分	指導内容における特記事項	期 間
オフィスアワー		平成 年度全期間
クラス担任		平成 年 月 ~ 年 月
クラブの顧問		
その他		平成 年 月 ~ 年 月

7. 上記項目で表せない教育活動 (必要があれば記入)

教育活動 (名称等，具体的に記入してください。)	期 間
	平成 年度全期間
	平成 年 月 ~ 年 月
	平成 年 月 ~ 年 月

III. 社会貢献の領域

・学協会，審議会委員など具体的に実績（内容）を記入してください。

名 称（実績内容）	期 間
	平成 年度全期間
	平成 年 月～ 年 月

IV. 国際交流の領域

・具体的に実績（内容）を記入してください。

名 称	期 間
	平成 年度全期間
	平成 年 月～ 年 月

V. 組織運営の領域

組織運営の活動実績（全学，センターなどの委員）

名 称	期 間
	平成 年度全期間
	平成 年 月～ 年 月

VI. 以上の領域で表せないその他の活動実績

名 称（実績内容）	期 間
	平成 年度全期間
	平成 年 月～ 年 月

職 種 : _____
 氏 名 : _____

印

I 研究の領域(申告している重み: _____)

自己点検評価	目標達成率 _____ %	自己評価点(達成率×重み) _____
	実績に対する自己点検・自己評価, 評価点の根拠など	
評価専門委員会評価	評価達成率 _____ %	評価点(5点満点)
	教員の自己点検・自己評価, 評価点に対するコメント	

II 教育の領域(申告している重み: _____)

自己点検評価	目標達成率 _____ %	自己評価点(達成率×重み) _____
	実績に対する自己点検・自己評価, 評価点の根拠など	
評価専門委員会評価	評価達成率 _____ %	評価点(5点満点)
	教員の自己点検・自己評価, 評価点に対するコメント	

自己点検評価	実績に対する自己点検・自己評価，評価点の根拠など	
評価専門委員会評価	評価達成率	評価点(5点満点)
	教員の自己点検・自己評価，評価点に対するコメント	

IV 国際交流に関する目標（申告している重み： ）

自己点検評価	目標達成率	自己評価点(達成率×重み)
	実績に対する自己点検・自己評価，評価点の根拠など	
評価専門委員会評価	評価達成率	評価点(5点満点)
	教員の自己点検・自己評価，評価点に対するコメント	

V 組織運営に関する目標（申告している重み： ）

自己点検評価	目標達成率	自己評価点(達成率×重み)
	実績に対する自己点検・自己評価，評価点の根拠など	

国際交流					
組織運営					
合計	1.0	-		-	

総合評価：次の5段階で評価し、そのように評価した理由を記入してください。

・該当欄に 印を記入してください。

総合評価	総合評価点	該当欄に 印
特に優れている	5	
優れている	4	
おおむね良好	3	
改善の余地がある	2	
改善を要する	1	

・評価した理由：

センター長のコメント

必要があれば、センター長が記入

佐賀大学低平地研究センターにおける職員の個人評価実施基準

(趣旨)

第1 この実施基準は、国立大学法人佐賀大学における職員の個人評価に関する実施基準（平成17年9月27日制定。以下「個人評価実施基準」という。）第3に基づき、佐賀大学低平地研究センター（以下「センター」という。）における職員の個人評価の実施に関し、必要な事項を定める。

(評価体制)

第2 センターの個人評価に係る実施組織は、センター運営委員会が別に定める個人評価専門委員会とする。

2 センターが行う個人評価の対象とする職員は、センター専任の教員とする。

(点検・評価項目及び評価基準等)

第3 点検・評価は、研究、教育、社会貢献、国際交流、組織運営の各領域ごとに、個人の活動実績及び改善に向けた取組について行う。

2 低平地研究センター長(以下「センター長」という。)は各領域の点検・評価項目及び評価基準を定め、公表する。

3 各領域の点検・評価は、第4第2号に定める活動実績報告書によるものとする。

4 各職員は、各職員の個性を生かす評価を行うため、自己の職種、職務、能力、関心などを勘案して各評価領域における達成目標及び活動ウェイト「重み」配分を予め設定して申告する。

5 達成目標及び重み配分の設定は、別に定める「低平地研究センターにおける個人評価実施指針」に基づき行う。

(評価の実施方法)

第4 点検・評価は、次の方法・手順で、個人の活動実績及び改善に向けた取組について行う。

(1) 各職員は、毎年5月末までに個人目標申告書(別紙様式1)を作成し、センター長に提出する。

(2) 各職員は、毎年5月末までに前年度の活動実績報告書(別紙様式2)及び自己点検・評価書(別紙様式3)を作成し、センター長に提出する。

(3) 個人評価専門委員会は、毎年8月末までに各職員の個人目標報告書、活動実績報告書及び自己点検・評価書に基づき、本学及びセンターの目標達成に向けた活動という観点から審査し、これらを基に評価を行う。審査に当たり、個人評価専門委員会は、審査の公正性を確保するために、必要に応じて他の職員から意見を求めることができる。

(4) 総合評価に際しては、各職員から申告された重み配分を考慮する。

(5) センター長は、自己点検・評価書に評価結果を記入した個人評価結果(別紙様式4)を当該職員に封書で通知する。

(6) 各職員は、個人評価の結果に対して不服がある場合には、通知後1週間以内に不

服申立書(様式任意)をセンター長に提出することができる。この場合、センター長は、個人評価専門委員会において当該職員から意見を聴取する機会を設ける。

- (7) 個人評価専門委員会は、不服申立書を提出した職員からの意見を聴取の上、必要と認められるときは、再審査・評価を行う。再審査に際し、個人評価専門委員会は、先行する審査に際して意見を求めた職員以外に、更に必要と認められる者から意見を求めることができる。
- (8) 再審査・評価の結果は、センター長から当該職員に封書で通知する。
- (9) センター長は、センターの個人評価結果の集計と総合的分析を行い、結果を学長に報告する。

(評価結果の活用)

第5 評価結果の活用については、国立大学法人佐賀大学大学評価の実施に関する規則(平成17年3月1日制定)によるもののほか、次の各号によるものとする。

- (1) 各職員は、自己の活動状況を点検・評価し、自己の活動改善の資料とする。
- (2) センター長は、各職員の活動状況を点検・評価し、センターの活動改善の資料とする。

(評価結果の公表等)

第6 評価結果は、センター運営委員会に報告するとともに公表する。

- 2 個人の評価結果は、本人以外に開示しない。
- 3 前2にかかわらず、センター長、副センター長及び個人評価専門委員会委員は、必要に応じて、個人目標申告書、活動実績報告書、自己点検・評価書及び個人評価結果を閲覧することができる。

附 則

- 1 この実施基準は、平成18年2月27日から施行する。
- 2 平成17年度の職員の個人評価実施の試行に伴う日程は、別に定める。

低平地研究センターにおける個人評価実施指針

平成 18 年 2 月 27 日制定

1 個人達成目標及び重み配分の設定目的

教員の業績評価は、教員の諸活動の領域（研究、教育、社会貢献、国際交流、及び組織運営）について行われる。画一的な基準ではなく、各教員個人の個性を活かす評価を行うため、自主的に達成目標と活動領域の重み配分を設定して申告する。

2 達成目標設定の方法

各教員は、自己の立場、職務、能力、関心等を勘案して、研究、教育、社会貢献、国際交流、及び組織運営の各領域における達成努力目標を以下の例示を参考にして設定し、「個人目標申告書」（別紙様式 1）に記入する。

各領域における個人達成目標の例

I 研究に関する目標

- (1) 審査付き学術論文誌に論文を発表する。
- (2) 国際会議及び国内会議において、研究発表を行う。
- (3) 学内外との共同研究を推進する。
- (4) 国際共同研究を推進する。
- (5) 研究代表者として競争的研究資金などの公募に応募する。
- (6) センター業務と連携した研究テーマを推進する。

II 教育に関する目標

- (1) 大学院教育科目を担当する。
- (2) 部局の枠を超えて、横断的に専門教育に貢献する。
- (3) 教養教育科目を担当する。
- (4) シラバスを作成・公開し、教育内容の向上に努める。
- (5) 教育方法の改善に努める。
- (6) 卒業研究及び大学院研究指導を行う。

III 社会貢献に関する目標

- (1) 学会の委員・役員、審議会委員など学外の委員等の活動を行う。

- (2) 低平地研究会の運営に参画する。
- (3) 国内研究集会の開催に貢献する。
- (4) 学外からの依頼による研究集会、講演会に協力する。

IV 国際交流に関する目標

- (1) 国際低平地研究協会の運営に参画する。
- (2) 国際会議の開催に貢献する。
- (3) 国際会議に参加する。
- (4) 留学生の受け入れ・派遣・指導を行う。

V 組織運営に関する目標

- (1) センターの日常運営に参加する。
- (2) センター改組等、組織の発展に寄与する計画立案、改革等を推進する。
- (3) 全学委員会等の委員として大学の運営に貢献する。
- (4) 大学や部局等が開催する行事に参加し、その運営に貢献する。

3 「重み」配分の設定と使い方

センターは少人数組織であり、個々人の活動が組織に及ぼす影響が大きいことから、下表の重み配分基準を設ける。各教員は、配分基準の範囲内で重みの合計が1となるように設定する。但し、配分基準が自分に当てはまらないと思われる場合は、配分をセンター長と協議の上、設定範囲外に変更することも可能である。その場合には、理由を明記して個人目標申告書を提出する。

「重み」配分基準

評価領域 職種	研究	教育	社会貢献	国際交流	組織運営	合計
教授	0.3~0.5	0.1~0.3	0.1~0.3	0.1~0.3	0.2~0.3	1
助教授(講師)	0.4~0.5	0.2~0.3	0.1~0.2	0.1~0.2	0.1~0.2	1
任期付き教員	0.5~0.8	0~0.2	0~0.2	0~0.2	0~0.2	1